

令和6年度第2回乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会
議事要旨

1 開催日時

令和6年12月17日（火） 10時30分～正午

2 開催場所

広島市役所北庁舎3階 第2会議室

3 出席者等

(1) 学識経験者・教育関係者・関係団体代表者

朝倉 淳【座長】	（広島大学 名誉教授）
徳永 隆治	（安田女子大学教育学部児童教育学科 教授）
渡邊 英則※1	（認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園 園長）
福島 ニール 圭治※1	（広島市私立保育協会 理事長）
堂山 宗敬	（広島市私立幼稚園協会 副理事長）
梅野 和希子	（広島市保育園長会 会長）
木村 みゆき	（広島市立幼稚園長会 会長）
三吉 和恵	（広島市小学校長会 副会長）

※1 オンラインによる出席

(2) 事務局（広島市こども未来局・広島市教育委員会事務局）

幼保企画課幼保連携推進担当課長、幼保企画課保育園運営指導担当課長、
教育企画課長、指導第一課長、特別支援教育課職員※2、教育センター次長

※2 課長欠席のため代理による出席

4 議題（公開）

地域の課題に対応するために必要な取組等について

－ 本市における幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた取組 －

5 傍聴人の人数

1人

6 懇談会資料名

・ 本市における幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた取組について（資料1）

- ・ 広島市教育委員会指導第一課の取組について（資料２）
- ・ 広島市乳幼児教育保育支援センターの取組について（資料３）
- ・ 中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会資料（参考資料１）
- ・ 令和５、６年度開催各区における幼保小接続に関する合同研修会アンケート結果（参考資料２）
- ・ 広島市乳幼児教育保育支援センターだより（令和６年度第３、５号）

７ 出席者の発言要旨

事務局の説明に対し、以下のような意見・質問等があった。

※ ○は学識経験者・教育関係者・関係団体代表者、●は事務局職員の発言を表す。

「本市における幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた取組」について

- 幼保小連携について、当園も含めて現場の声をヒアリングしてみたところ、良かった点については、環境が変わるとパニックになるこどもがいたときに、入学式前に、小学校の体育館や教室などを見学させてもらえ、その配慮によりこどもがスムーズに接続することができたことが挙げられた。しかしながら、小学校によりかなり温度差があり、とても熱心な小学校はスムーズに接続できる一方で、校長先生に関心がない場合は、このような機会はないと聞いている。教育委員会に校長先生への裁量がどのくらいあるか分からないが、好事例やこのような取組を広めてほしい。

マイナス面としては、園ではこどもの育ちを指導要録も含めて詳細に記録し、送り出す準備をしている。この受止めについても小学校の先生により温度差があり、園に来て実際にこどもの様子を見る先生もいれば、指導要録に記録した内容すら理解していない先生もいる。入学後には、「関わりについてもう少し詳しく知りたい」と尋ねられることもあれば、「聞き取りに来た先生と実際の担任が異なり、校内で情報共有ができていないため、４月に再度、聞き取りをさせてほしい」とお願いされることもある。このように、小学校やその校長先生によって、温度差があり、熱心な先生がいる一方で、関心のない先生もいる。

小学校の情報共有が十分にできていないと、こどもに不利益となるため、担任になった先生がしっかりと情報共有してほしいこと、そして、小学校入学前に園が学校に出向くことができるよう開放してほしいことを要望する。

- 先ほどの指導第一課の説明のとおり、船越幼稚園、船越小学校は、令和５、６年度、幼保小連携推進園・校となり研究を続けている。ちょうど、昨日、小学校は公開授業を行った。昨年度は幼稚園と小学校が公開し、今年度は小学校のみが公開し、授業公

開後に協議を行った。公私ともに参加があり、保育園、幼稚園、小学校、中学校の多様な園、校から参加があった。今年度公開した１年生のクラスは、昨年度まで派遣教諭として幼稚園に来ていた先生が担任をしている。授業後の協議では、活発に意見交流が行われ、私立園からの質問もあった。協議では、児童のモチベーション、先生の言葉がけの温かさ、配慮を必要とする児童への関わりなど、先生の丁寧な関わりについて話題となった。研究会なので、いつもとは違う雰囲気だったが、児童は主体的であり、先生も丁寧に児童の意見を確認しながら授業を進めた。しかし、授業のまとめの時間が少なくなったため、協議では、４５分の授業の組み立てについても意見が出され、小学校の授業の組み立ての難しさを感じた。保育や授業を公開し、多様な校種に参加してもらい、同じ場面を共有しながら話し合うことは、意義があるため続けていきたい。授業のまとめの際に児童が「これだ」という実感をもって授業を終えることができたかどうかという点についても話題となっていた。幼稚園では、登園から降園までの生活や遊びの中で、何かに没頭でき、その時間を十分に確保できる。夢中になって遊ぶ中で、「分かった」、「もっとやりたい」という気持ちを持ち、自ら発信し、学ぶことができる。協議では、このようなことについても話し合うこともできるだろう。連携として、こどもの実態に合わせて５歳児の生活を見通し、接続カリキュラムを作成し、改善していくこともできるだろう。

- 幼保小接続プログラムについては、「こどものために」が大切だと思う。幼保小が互いの話を聞いていくことはとても大切だと感じている。以前は、園で「園へ行こう週間」をした際に、参加した小学校の先生の感想が「かわいいね」となり、こどもの姿についてなかなか話が発展しなかった。最近では、先ほどの説明のような取組などにより、保育参観後の話し合いでは、こどもの姿やつぶやきをもとに小学校の先生と話をすることができ、こどもの姿を共有し、こども理解をすることができると感じている。ここ何年か公開をする中で、公開にどのように意味をもたせていくのかが大事だと感じている。先ほどの話にあったように学校に温度差があるとき、このように意図的に働きかけをしていくことが大切なのではないかと思った。

「各区における幼保小接続に関する合同研修会」では、園と小学校の先生で「遊び」と「学び」の言葉についてイメージしたことを出し合ったことが印象的だった。小学校の先生は「遊び」については、「休憩時間」、「ゲーム」などのイメージを出し、「学び」については、「漢字ドリル」、「算数の計算問題」などのイメージを出していた。一方で、幼稚園・保育園の先生は、「遊び」については、「興味、関心」、「こどものブーム」などのイメージを出し、「学び」については、「遊ぶこと」、「好きなこと」、「自然物」などのイメージが出され、その差に驚いた。このように話してみても初めて分かることもあるため、研修の場で、互いのことについて話すことは大切だと感じている。

昨年度から始まった研修を、是非、継続してほしいと思う。先ほど、校長先生が変わると対応が難しくなるという話もあったが、校長や園長ばかりが「やろう」という気持ちをもってもなかなか変わらない。職員にいかに浸透させていくかが大事だと思う。職員同士が学び合える機会があるとよいと思う。

- 先日、教職員の連絡調整や指導、助言を行う立場である教務主任に対して教育委員会指導第一課から、来年度は特に幼保小連携を重視していくことについて説明があり、本校の教務主任から熱く報告を受けている。保育園や幼稚園を経験したこども、経験していないこどもも小学校に入学する。そのこどもを理解ができていないととても辛い。令和7年度の幼保小連携について考える際には、園・校が作成したアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを持ち寄るようにとあった。本校は、20園から33人の入学を受け入れ、1園1人の状況である。小学校が作成した接続カリキュラムを渡し、可能であれば園のものを受け取るやりとりをできる範囲で始めようと思う。このような連携を通して、校長による温度差をなくし、安心してこどもを小学校に預けてもらえるように準備をしている。

次に、園で遊びを中心にして「学び」につなげていることについては、先ほどの意見のとおり、昔から園と小学校に違いがあった。小学校では、現在、授業改善が行われ、こどもが主体となり、日常生活の中から「なぜ」、「どうして」を見つけることができるよう、友達との対話の中で「こうではないか」ということを見つけることができるよう、そして、その学んだことを日常生活に戻り生かしていくことができるように取り組んでいる。視点がずれてしまうことや、道半ばのところもあるが、一斉の授業で教師主導にならないように進めている。

幼保小連携推進指定校・園の公開研究会については、指導第一課から小学校からの参加について連絡があり、本校からも1名参加した。幼保小連携推進園は、小学校教諭が幼稚園に派遣され、園の先生がどのようにこどもを見取っているのかについて学び、小学校に戻ってきている。色々な面で園と小学校がつながっていくとよい。

- 先ほどの補足となるが、校長先生に温度差があると話したが、校長先生の中には、引継ぎをした際に、先入観があってはいけなくて、「自分の目で見たい」と話す先生もいる。必ずしも幼稚園に興味がないわけではない。
- 保育園は人材不足が積極的に取り組めない理由の1つとなり、なかなか、前向きに進められないようだ。自園の地域の話となるが、20年ほど前、小学校の校長先生が、地域で交流しようと、公立保育園、私立保育園、公立幼稚園、私立幼稚園の4園で交流し、小学校に円滑に接続しようと考えた。そのおかげで、小学校とは色々な交流、

関わる機会が増えた。また、近隣園の方々と保育・教育について話す機会が増え、ありがたかった。そして、令和2年に幼保小連携推進園・校の取組に4園交流の中の公立幼稚園が指定を受け、非常にスムーズに幼保小連携の取組が進んだ。現在も4園で年3回交流があり、小学校には、年に4、5回行くことができ、幼保小連携推進担当を中心に、非常にスムーズに連携でき、架け橋期の教育が充実している。どこでもこのようにできるわけではないと思うが、まず、横のつながりを最初に作り、このような取組に入っていくと、校長先生が変わっても取組が先に進んでいるため、皆が前向きになると思う。この取組が始まってから、こどもも問題なく、小学校につながっていると感じている。横のつながりを十分に作り、そして、縦につなげていくためには、派遣教諭や連携の担当者などが深く関わってくると思う。円滑な接続に向けた取組ということで、本園の地域の取組について紹介した。

○ 課題に「本市における幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた取組」とある。

「連携」を中心に考えるのではなく、「接続」のほうに意味があると思う。保育園も含め、幼児教育と小学校教育が、全く別だという話ではなく、同じ方向に向き始めていることを、校長先生や園長先生がどこまで共通認識できているだろうか。小学校の先生は、どちらかといえば、教えたことができるようになることを重視している。先ほど、研修会で「遊び」と「学び」のとらえ方に違いがあったという話があった。「教わる」ではなく、自分で学んでいくこと。分からないことがあったらどうしたらよいかを自分で考え、主体的に取り組み、周囲とも相談して解決していくことが「学び」ではないだろうか。学習指導要領の中に、「主体的・対話的で深い学び」、この言葉が入り、小学校教育もそれを目指さなくてはいけない。園は遊びの中でこどもが、そのようなことをたくさんやっている。幼保小の違いではなく、同じ方向を向き、探究する姿勢が大事だという共通理解は、連携をそんなにしなくてもできる話だろう。小学校の先生に、「遊びの中でこんなにも学んでいる」と分かってもらえれば、小学校の先生の理解が進むし、園の先生も学習とは違い、「こんな遊び方が大事なのだ」、「こういうことが大事なのだ」と主体的な学びが大事なことが分かる。3つの資質能力でいうと、電卓的な掛け算をすることや、漢字を覚えることではなく、それを使ってどう考えるか、答えを出していくのかを自分で考えることができる力をどう育てていくかということ。そのことを、乳幼児期から小学校に向けてきちんとやっていきたいと思いますというのが架け橋であり、そのスタンスについて共通理解されないと、連携することが、余分なことをしなくてはいけない、小学校と園が色々な交流をしなければいけないという受け身の取組になってしまう。そうではなく、こどもが育つと小学校の授業も変わってくる、園の保育を充実させるとこどもが育ち合っていく、その共通理解をどうしていくかがとても大事だと考えている。

これから先、地域の色々な所でこどもが育っていく。園から小学校に行き、新たな世界で色々なことを感じる、地域でもこどもは色々なことを学び、人と人がつながることで、人への優しさを感じる。このような互いに WinWin の関係ができてくる、その共通理解をどのようにしていくかではないかと思う。

横浜の小学校の事例、小学校 1 年生が生活科で水遊びをする際に、公立保育園に水遊びの道具を貸してもらい、夢中になって遊ぶ授業をしようとしたが、1 年生は、本当に水遊びができなかった。そのあと、公立保育園の 5 歳児が小学校に来て、水遊びの仕方を見せると、1 年生は相当の刺激を受けよく遊び、盛り上がった。そうすると、次のクラスが同じように水遊びをするときには、保育園のこどもがいなくても、前のクラスのような水遊びをやりたくなっていた。小学校の先生は、例年どおりの授業のやり方しか考えていなかったが、「こうやってこどもは学ぶのだ」とこどもの様子を通して分かり、面白かった。そういう連携であれば意味があると思う。小学校が少しの時間だけ幼稚園・保育園と連携して、幼稚園や保育園のことが分かりましたとか、園のこどもが小学校の図書室に行ってきましたとかではなく。こどもが一緒になり、交流ができ、互いを刺激し合う連携となると、互いの授業や保育も面白くなり、こどもも育つ。そんな取組をどのように広島市が広げていくかについて議論できるといいと感じている。

校長、園長、職員が「させられている」とみんなが受け身になると、こどもの主体性を大事にした連携や接続はできない。「やっぱり面白い」、「みんなやったほうがいい」そういう取組がどんどん生まれてくる流れを教育委員会を中心にできれば、皆が「やってみたい」となっていくのではないだろうか。そんな取組がどんどん出てくると嬉しい。

- 今日、幼保小連携や接続は、教育活動の中で、大きな流れとなっている。外国の事例を見れば、我が国でも将来的に入学時期の早期化も考えられる。幼保小連携は重要な課題であり、現行の「小学校学習指導要領」第 1 章総則には、幼児教育を通じて身に付けたことを小学校で生かし、連携することについて述べてある（第 2—4 学校段階等間の接続）。そのことを踏まえると、広島市が、先進的に動いていることは強みだと思う。

幼保小連携推進園・校の加配教員について質問したい。1 点目は、加配教員が幼稚園に派遣される期間はどれぐらいなのか。2 点目は、幼稚園教諭免許状がある教諭が小学校教諭になり、小学校から幼稚園に派遣され、そしてまた小学校に戻るのか。3 点目は、派遣された加配教員は、スタートカリキュラムの調整、幼保小連携の広報などの任務が中心なのか、保育活動に加わり実践をしているのか。園で実践を経験していれば、小学校に戻ってからそのことが生きてくるだろう。数年前の懇談会でも、小

学校から幼稚園に派遣されている先生がいるという話があった。その後、その先生が、小学校に戻りどのように活動しているのか、追跡をしているのか。最後に、加配教員の取組をこれから拡大していける見通しがあるのかについて伺いたい。

- 加配教員の派遣期間は２年間であり、小学校に籍を残して幼稚園に派遣されている。加配教員は、幼稚園教諭免許状も持っている人を選び、２年の派遣期間が終わると小学校に戻る。連携の中身については、質問のとおり広報のようなこともしているが、園で、担任はもたないが保育に関わり、中心となって幼保小連携を進めている。

小学校に戻った加配教員の多くは、校内で１年生の担任に任命され、園での経験を授業実践に活かしたり、スタートカリキュラムの実践に取り組んだりしている。これ以降は、統一的ではなく、継続して低学年の担任をもつ先生もいるが、転勤後に中、高学年の担任をもつこともある。

加配教員は、本市独自であり、今後の加配教員の拡大については、教員数に限りがある中で、本市としてどこに力を注いでいくのかということもある。いじめ、不登校、特別支援に係る加配もあり、今後の施策による。

どの園と校が連携するのかについては、公立で、比較的距離が近い園と小学校を優先的に選んできた。次第にこのような園も少なくなっているため、どのような交流をしていくのかについては検討したい。

- 個人的に承知している派遣教諭のその後については、当該園・校で活躍後に、転勤した先で、派遣教諭として学んだ考え方を学年に関わらず学校内で推進し、活躍している。これは、先ほどの御意見のとおり大事なところだと思う。無制限に加配教員を配置することはできないが、核となり、中心となって進めることとができる人材が伸びるよい制度だと思う。

これまで取組そのものがどうかについて意見を出してもらった。その中で、取組をどう進めるかについても色々な意見が出されている。例えば、園と校が地域で連携し、複数の体制で進めていくことが効果的ではないかということ、中身を園内・校内でどのように学び合うかが大切であること、接続に関する研修や制度を継続することなどが出されている。

- 架け橋期のカリキュラムは、教育委員会ですでに作成しているのか。カリキュラムを作成し、PDCAサイクルにとあるが、手探りで始めるのではなく、画一的なものでやるフェーズではないか。園もICTが普及しているため、人的な予算をかけなくても、teamsなどを使い、小学校と横断的に情報共有できるシステムで事例を積み上げ、それをAIにかけ、ビッグデータとして生かすなどのやり方もある。予算を掛け

ずにどのように取り組むかも大切だろう。カリキュラムは作成されているのか。

- スタートカリキュラムの作成については、随分以前に各校に知らせ、それぞれの学校は作成したものをもっている。アプローチカリキュラムは、沢山の園数があるため、すべての園に作成してもらっているわけではない。スタートカリキュラムは、小学校に毎年提出してもらっている。
- 園、校でバラバラのカリキュラムができているということか。
- 小学校によって異なる。
- 私立幼稚園協会にも情報提供してもらえれば、照合させていく。各小学校が作成し、内部資料として抱えるのではなく、オープンにし、閲覧できるように情報共有してほしい。
- 小学校は園に渡すことができるよう準備している。データが必要であればそれにも対応できる。本校に就学する予定の園にはお渡しすることを考えているため、安心してもらいたい。
- スタートカリキュラムについては、園、校、地域の実情が違うため、一律に同じようなものを作成するのではなく、実情に合ったもの作成し、PDCA させていくことが望ましい。作成にあたって連携・接続が進むとともに、アプローチカリキュラムも、スタートカリキュラムも園や学校だけで作成するのではなく、相談しながら、一緒に作成していくことが大事だと言われている。
- 核となるもの、共通項だけでも全市としてあり、そこから、各園、校が作成していくほうがよいのではないか。フォーマットがないよりは。
- 教育委員会から大筋のフォーマットは提示され、それに基づいて、園や地域の特性に応じて各園、学校が作成している。縦軸や横軸の項目はほぼ同じような項目となっている。
- 最後に、3 点お話したい。1 点目、指導要録等を接続にあたり引き継ぎ、共有していくことについては、対面で色々な話をするのはもちろん大事だが、しっかりと書かれたものは活用していくことが本来、大事である。一部に、先入観を持たないよう

にあえて目を通さないということがあった。色々な思いや考えがあつてのことだと思うが、本来、読まないもののために作成しているわけではなく、読むことがベースだと思うため、慎重に考え、議論も必要だと思う。

2点目、説明の中に、アンケートで幼保小連携が進んでいない状況が分かったとある。十分に進んでいないかもしれないが、全然進んでないとは思わない。ただ、先ほどの御意見のとおり、格差、温度差があるのだろう。特にアンケートについては、参考資料2、令和5年度と6年度を比較すると、取組が後退しているようにも見えるが、これは、アンケート等の対象者が異なることや、アンケートを1年間のどの時期に取ったのかも影響しているだろう。また、回答は、令和4年度までのコロナ禍の状況を踏まえて回答したところもあるため、アンケートは丁寧に見ていきたいと思う。いずれにしても、ここまでの議論の中で、取組が進み、大きな成果を上げている部分があることは間違いない。一方で、残念ながらそういう状況になっていないところもあるため、一層、全市展開がされていくことが望ましいと受け止めた。

3点目、考え方、本質的なこと。接続の取組はオプションではなく、本来、大切な軸として、あるいは、基盤として、存在するところだろう。何かが増えたとかではなく、本来大事な部分に光を当てて、幼児教育・保育も、小学校以降の教育も、より良いものにしていくために欠かせないものであり、本質的なものだとして受け止めたい。そう考えると、どういうふうにしていくかということは大切なことだが、やるか、やらないかではなく、いろんな状況に関わらず展開できるようにしていくことが大事なことだと思う。

- 各区における幼保小接続に係る研修会で、講師の講演が良かったという話があったと思うが、小学校の教員や保育者といった関係者だけでなく、園や学校の保護者とか地域住民に、「教育がこう変わってきたよ」、「幼児教育とか、保育とか小学校教育が、こういうことをやろうとしている」ということが伝わるような機会があればよいのではないかと、横浜でも感じている。